

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第53号

平成29年8月8日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

## 正行の後見役、恩智左近は延元2年6月急死

しかし、八尾市史には四條畷の戦いで戦死と

### 猛暑の中、16人の会員出席

猛暑が続き、宇宙が荒れ狂っているのかと見まがうばかりの大雨が局所を襲っています。九州北部では、大雨が土砂、樹木を押し流し、今も、多くの方が避難生活を余儀なくされていますことにお見舞いを申し上げます。

このように猛暑が続く中、7月の例会は全国60カ所を超える観測地点で35度以上の猛暑日を記録する中、会員が一人、二人と集まり、休会中を除く全員が顔をそろえました。

楠正行通信51号(久子の方、出身は甘南備か、京都か)、同52号(楠正行に遺腹の子がいた)を確認、また、安井さんからは東高野街道枚方市内(出屋敷)にある円通寺(創建時期不明・延宝3年1675再興、浄土宗専念寺末寺円通寺と称す)境内にあった「楠木松」の下に、四條畷の戦いで戦死した正行の従兄弟、和田賢秀の胴体が葬られている、との情報もたらされました。

### 史料がほとんどない恩智左近

さて、今月のテーマは、「恩智左近と正行」です。

しかし、残念なことに、恩智左近に関する史料は極めて少なく、出版物もほとんどなく、研究論文も見当たらない状況です。

国史大辞典を繙いても恩智左近の項が見当たりません。「楠氏八臣」の一人と云われる恩智左近ですが、正行以上に、その人物像を伝える史料はないようです。

今回の勉強会は、わずかに八尾市史と、恩智城址跡や恩智左近の墓に立つ現地説明版を基に議論をしました。

以下、八尾市史「南北朝時代の八尾」より転載。

### 南北朝争奪の巷となった八尾

#### 河内地方の状況

この頃、近畿における各領主たちは、鎌倉幕府の大きな豪族を基にした所の御家人中心制度に対して、新しく

起ってきた所の村落を単位とする一類一党の団結による郷村制の上に立つ在地武士の組織をもって対抗するの形勢となり、こうした力が新しい制度を望んで、幕府を倒そうとする朝廷との結びつきを、より一層容易に、かつ密接にしたものということができる。

延元元年、5月25日、楠木正成は湊川に戦い、自害したが、この時、橋本太郎正員、神宮寺太郎兵衛正師、矢尾新介正春ら、宗徒の一族28人がこれに殉じたと伝えられている。

この頃、矢尾の地域は、赤坂をはじめとして南朝方の拠地であった吉野や観心寺、金剛寺の地と、北朝の拠点である京都との中間要地として、常にその前線基地となり、八幡、飯盛、萱振、八尾、四天王寺といずれも両者争奪の巷となって激戦の渦の中におかれることとなったのである。

殊に東高野街道によって飯盛が河内の入り口となり、八尾が南朝方の第一線基地となって、ここに当地域は或は南朝軍の有となり、或はまた北朝方の手に占められて、文字通りの修羅の巷となった。

### 後醍醐帝の吉野還幸に随った左近

#### 八尾城と八尾別当賢幸

正成が赤坂に勤王の旗揚げをしたとき、八尾に八尾別当賢幸、恩智に恩智左近満一、神宮寺に神宮寺小太郎があった。

八尾別当賢幸は、早く正成の父、正玄と常に領地の事に関して争いの事あり、ある時は八尾氏が領有し、またある時は楠氏がこれを奪い返すという有様であった。

元弘2年1332、正成は八尾の地を支配下に置くべく画策、後醍醐天皇の命を受け八尾別当賢幸に権僧正の位を賜り、楠方に帰するように計った。別当賢幸は南朝方に属し、河内一円は正成の支配の中に統一されることとなった。

湊川の戦のあった延元元年1336、末に後醍醐天皇は吉

野に還幸されたが、この時、八尾別当賢幸は恩智左近とともにこれに随って吉野に至り、吉野の守護にあたることとなった。

しかし延元2年の頃には、いつしか八尾の地域は北朝方の占拠する所と為っていて、北朝方はこれを前線基地として南朝の吉野に対して備えを張るようになった。城を修復し、防備を厳にし、堀構えもいかめしく備え、ここに伊香賀の土屋氏、秋山彦三郎、同彦小五郎らが立てこもった。

八尾別当賢幸は、終始南朝方として吉野の守護にあっていたようであるが、延元3年7月、疫病のため67歳をして病死した。

正平2年、正行は、和田助氏をして秋山彦六の立てこもる八尾城を攻めるが、策をもって細川顕氏の軍を打ち破っている。

### 敵地の摂津に出向き一日一夜の稲刈り

#### 恩智左近と神宮寺小太郎

恩智左近満一は、俗に楠公八臣の一人と云われ、古く恩智神社の社家恩智貞吉の名が見え、その子孫と云われ、恩智神社の神主として恩智における豪族として権勢を有し、信貴山への登り口を扼し、ここに恩智城を築いて東高野街道を抑えて、早くから楠方に属して活躍し、元弘年間、楠木正成の千早籠城の際には、志貴右衛門らと共に千早城に立てこもり、敵の通路を断ち切り、所々の敵陣を夜襲しては、敵の術策を探ってこれを城内に通報し、奔走したのであった。

建武元年1334、飯盛城を攻撃の際には、八尾別当賢幸とともに、第一線の軍として活躍したが、延元元年1336、湊川に楠木正成の戦死した後は、一時、八幡に出向して足利尊氏の軍に挑戦したこともあった。

そして、この年7月、高師直が京都における兵糧が少なくなったため、飯盛の城を取り囲み、河内半国に押し寄せて、その田畑の稲を刈り取って引き上げた。このため恩智左近は、これが報復のために、和田氏とともに渡辺から舟で淀川を下り、摂津方面へ出向いて一日一夜その地の稲を刈り取って持ち帰ったのであった。

後、楠正行に従って四條畷に出陣し、正行と共に正平3年1348、正月5日、戦死したと伝えられる。(扇谷注：この部分は誤りと思われる。「恩智左近の墓」の項参照)

### 延元2年6月、戦乱の中、病死

八尾市史から、南北朝時代に八尾という地の果たした軍事的要衝としての位置が分かります。

京の都と吉野を結ぶ東高野街道沿いの中間点に位置し、双方が軍事的拠点としてその支配下に置くべく、争奪が繰り返されたのです。

恩智神社の神職であった恩智左近は、恩智を支配下に置く豪族として、早くから楠方に属して活躍したとありますが、河内・東条の前線基地にある恩智・八尾の死守

には相当の力が入ったことでしょう。

湊川の戦で、父、正成をなくした正行を支えて楠氏一族を束ねる後見役であったと思われる恩智左近ですが、延元元年1336から延元3年1338まで続く第1期戦乱の時代(足利軍との河内南部・北部での戦線)の渦中、延元2年の6月、急死をしています。その年の3月、恩師龍覚坊を亡くした正行ですが、二人の後見・指南役を失った正行の心中が察せられます。

**恩智城址** 〒581-0883 八尾市恩智中町  
近鉄大阪線恩智駅下車徒歩約20分

恩智城址公園には、高さ約二メートルの自然石碑「恩地城址」が建つ。現地説明板は、「恩智城は中世この地の豪



族恩智左近満一が築いた。自然の高地を利用した城郭で、高安連峰との間に堀を廻らせ前方に大阪平野を一望のもとに収めた。堀の中にかつては小島があったがそれは昔の一の丸で現在の城址は二の丸跡という。正平三年(一三四八)四條畷の戦いで楠正行が戦死し恩智城も落ちた。学制頒布の時ここに小学校が新築され、今では桜の名所として知られる。」とある。

恩智城址公園には、「南高安小学校(旧恩智小学)発祥の地」の石碑もたち、公園正面には旧小学校の門柱が左右に残る。

**恩智左近の墓** 〒581-0883 八尾市恩智中町  
近鉄大阪線恩智駅下車徒歩約20分

恩智城址の西に恩智左近の墓が建っている。案内板に「恩智左近満一は恩智神社



の社家の出で、この地の豪族として恩智城を築き、楠木正成方に味方した八臣の一人である。湊川の戦の後はその子正行を助けて南朝方を守ったが、不幸にして延元二年(一三三七)六月熱病のため急死した。」と記されている。

墓石前の自然石(高さ約1.2メートル)に、「贈従四位 恩地左近満一之墓」と記される。

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)